裴秀禹貢地域圖のスケールについて

森　鹿　三

裴秀（224—271 A. D.）禹貢地域圖は支那の地圖を論ずる者の必ず言及する所であるが、その分率即縮尺に關しては未だ分明ではないやうである。內藤湖南先生もその『地理學家朱思本』に於て、馬徵麟が裴氏十八篇は二寸を以て千里となすといふも、何を根據としてゐるのか詳らかにせぬと言つてゐられる。然し二寸を以て千里となすといふ馬氏のこの說は、隋書卷六十八宇文愷傳に「昔張衡渾象以三分爲一度。裴秀輿地以二寸爲千里云々」とあるに據つたのであらう。この二寸千里說にも必ずしも從ふわけにはゆかぬ。といふのは、北史卷六十宇文愷傳には「以一寸爲千里」とあつて、孰れを正しとするか決し難いからである。私はこの二說よりも、むしろ傅暢の晉諸公讚北堂書鈔卷九十六所引の記事を以て實を傳へたものと思ふ。從來支那の地圖を論ずる人達が引用してゐないやうであるから左に紹介する。

司空裴秀。以舊天下大圖用縑八十疋。省視卽難。事又不審。乃截減爲方丈圖。以一分爲十里。一寸爲百里。備載名山都邑。王者可不下堂而知四方也。

傅暢は晉書卷四十七に傳あり。それによると東晉成帝の咸和五年（330 A. D.）に卒してゐるから、裴秀の時代とは五六十年しか距たつてゐない。又隋書經籍志晉諸公讚の條にはその職祕書監とあれば恐らく裴秀の圖を親しく見たであらう。さればこそ、前揭の精細な記事を書きえたのではなからうか。宇文愷の言よりも信憑するに足ることは言ふまでもなからう。

吊一端は幅二尺四寸、長一丈であるから、方丈圖を作るには一疋の吊があればほゞ間に合ふ譯で、舊天下大圖が縑八十疋を用ひたのと比すればよほどの裁減で

ある。方丈圖といへばその大體の大きさは東方文化研究所で編纂した『東亞大陸諸國疆域圖』の四倍大位である。この疆域圖のスケールは四百萬分の一であるが裴秀の圖は一寸百里であるから百八十萬分の一といふことになる。この一寸百里といふ縮尺は、裴秀の說を遵奉した唐の賈耽の圖にも繼承されてゐる。支那の古地圖の縮尺については、他日詳しく考へてみたいと思つてゐるが、今はたゞ傳暢の記事を紹介するにとゞめる。

雲岡便り

水野　清一

雲岡も漸く暑くなりました。綠陰も深くなりました。一個月前は洞窟內の調査に足の先が冷えて困りましたが、やつと洞窟內の涼しさが慕はれるやうになりました。濃い綠のかたまりは柳です。大地は漸く青味を帶びて來ました。空は飽くまで青く、夏雲がたゞよつてゐます。川幅だけの谷間ですが、低い丘で晴々としてゐます。時間改正で、內地と同じ時間になりましたから、七時頃にはまだ太陽が第三洞の丘の彼方にあり、その代り夜の八時頃まで明るく夕方の靜かな景色を嘆賞してゐます。見物人は每日多くうるさいものですが、それがたまさか今日のやうに來なくなると何だか淋しいやうな氣がします。石窟の調査はとにかくとして、このほかに殿堂樓閣もあつたらうと搜索に努めてをりますが、未だに瓦の一片だに現れません。第九、第十洞、通稱五華洞の前を發掘して前面にあつた建築物の正體を確めようとしてゐます。磚を敷きつめ、切石を積んだ、大きな礎石の建物下部に出て參り、發掘監督の小野君は力んでゐます。果して遼金時代にまで遡りうる遺構かどうかを確めようとしてゐますが、出土の瓦が少く困つてゐます。しかし、相當に堂々たる建築物で、現在の伽藍よりはるかに大規模です。